# 和漢薬研究所

和漢薬研究所の前身である薬学部和漢薬研究施設は、大学院薬学研究科（修士課程）と同時に発足した。両者とも新制大学では始めてということで全国的に大きな話題になったが、薬学部のそれまでの実績が評価された上での快挙と理解された。すなわち、富山大学附置和漢薬研究所の前身は、昭和38年４月１日に設置された薬学部和漢薬研究施設であり、富山県の伝統的な家庭薬の発展・近代化に協力すべく、和漢薬製剤を構成する主要生薬（牛黄、センソ、麝香、人参など）の薬効の科学的裏付け、化学成分の同定、品質評価法の確立に寄与してきた。また、昭和27年に、富山県の主導する富山大学設置期成同盟会の寄付によって医薬資源研究所が奥田キャンパス薬草園内に設けられ、文部省の予算配分も得て、和漢薬資源の開発研究に取組み注目すべき成果を挙げてきたことも基礎づくりの一端であった。期が熟し、わが国固有の和漢薬のみならず全世界の伝統的薬物（民族薬）一般の科学的評価、臨床応用、資源の安定的確保に関する研究を命題とする国立の施設が富山の地に誕生したのであるが、その実現までに各界あげての支援をうけたことを忘れてはならない。

この和漢薬研究施設は５部門の設置を年次計画したもので、初年度に資源開発部門が設けられ、木村正康教授（薬物学講座担当）が併任した。以来、昭和47年度までに次記の全部門の完成をみたが、各部門の名称によって一貫した研究体制の流れを知ることができる。

各部門の設置年度

| | |
|---|---|
| 資源開発部門 | （昭和38年度） |
| 生物試験部門 | （昭和39年度） |
| 臨床利用部門 | （昭和40年度） |
| 病態生化学部門 | （昭和44年度） |
| 化学応用部門 | （昭和47年度） |

## 第１節　和漢薬研究施設棟の新営

和漢薬研究施設が発足したものの、施設固有の研究棟の建築は先のことであった。幸い薬学部新校舎は大学院を置く学部の基準面積で建てられていたので余裕があり、１号館４階と２号館３階の計２講座分の面積をつかって研究活動を開始した。昭和40年度に資源開発、生物試験、臨床利用の３部門が揃ったところで研究棟の新営工事が薬学部２号館の東裏側で始まった。翌41年３月に４階建て、総面積560坪の独立棟が竣工、同時に、薬学部創立七十五周年記念事業会の寄付になる薬学研究資料館（２階建98坪）が本館北側に付設された。各部門の配置は、上から生物試験部門、臨床応用部門、資源開発部門と

和漢薬研究施設棟（薬学部２号館方向）

和漢薬研究所（正面）

なり、１階にはその後設置された病態生化学部門と化学応用部門が同居したが、48年には化学応用の研究室が資料館に隣接して増設され同部門が移転した。

## 第２節　和漢薬研究所への昇格

当初計画の５部門が出揃い、和漢薬の科学と臨床応用に関する先導的な研究成果を続々と挙げる一方、「和漢薬シンポジウム」等の学会活動を積極的に展開した結果、富山に和漢薬研究のメッカありと認識されるようになった。次ぎなるステップは研究所への昇格であったが、昭和49年６月という予想外の早さで実現した。薬学部教授会の熱意と関係各位の支援の賜物であり、和漢薬に対する市民の大きな期待を象徴するものであった。大学附置の研究所になったことで、形式的に薬学部と縁が切れたことになったが、施設時代と同様、学部専門教育の分担、大学院特論の開講、卒業研究生・大学院学生定員の張り付け等、学部および大学院の教育研究組織と密接な連携を継続させた。

## 第３節　研究活動

各部門の目指した研究目的の詳細は設置要求書にあるが、端的に表現すると次のようである。

○資源開発部門： 和漢薬のみならず世界各地の民族薬物の基源の究明、真偽鑑別、活性成分の解明を行い、それらを総合した品質評価法を確立する。
○生物試験部門： 和漢薬の経験的薬効を近代薬理学的手法により再検討し和漢薬独特の複合効果の本質を究明、合理的な新評価法を確立する。
○臨床利用部門： 和漢薬を中心とした伝統薬物の合理的な臨床利用を推進すべく、分子生物学・内分泌学を基礎とする薬効評価と作用機序の解明を行う。
○病態生化学部門：和漢薬の薬効評価に適した動物病態モデルをつくり、生化学的・免疫学的手法を駆使して体質と薬効との相関関係を解明する。
○化学応用部門： 和漢薬を中心とする動植物の生理活性成分の分離・構造解析を行うとともに、それら有効成分の化学修飾を行い構造活性相関を解明する。

富山医科薬科大学への移管（昭和53年６月）までの具体的な研究成果は、以下の和漢薬研究施設・研究業績集（昭和38年～同48年のまとめ）、研究所年報に報告されている。

富山大学薬学部・和漢薬研究施設研究業績集
（昭和48年６月刊行）
和漢薬研究所年報　第１巻（昭和50年５月）
和漢薬研究所年報　第２巻（昭和51年３月）
和漢薬研究所年報　第３巻（昭和52年３月）
和漢薬研究所年報　第４巻（昭和53年３月）

なお、「和漢薬シンポジウム」は和漢薬研究の高度化と研究者の全国的な連携を図るべく昭和42年から実施されているが、このシンポジウムは、大阪大学医学部の山村雄一教授の肝いりで発足したものである。その後毎年開催され、昭和59年４月「和漢医薬学会」に引き継がれるまで17回を数えた。下別表に富山医薬大へ移行（昭和53年６月）するまでの期間に開催された「和漢薬シンポジウム」の主題をまとめた。

**和漢薬シンポジウムの開催**

| 回 | 主　　題 | 開催期間 | 開催場所 |
|---|---|---|---|
| 第１回 | 和漢薬研究の近代的アプローチ | 42年９月９～11日 | 立山弥陀ケ原立山荘 |
| 第２回 | 腎と利尿 | 43年８月３日 | 富山県民会館 |
| 第３回 | ニンジンに関する諸問題 | 44年10月11～12日 | 京都薬科大学 |
| 第４回 | 抗炎症と柴胡 | 45年９月13～14日 | 宇奈月グランドホテル |
| 第５回 | 三黄丸と高血圧 | 46年９月４～５日 | 立山弥陀ケ原立山荘 |
| 第６回 | 和漢薬の生理活性とその成分<br>臨床応用を求めて | 47年８月26～27日 | 大阪大学医学部 |
| 第７回 | 体質とくすり―研究方法を指向して | 48年９月14～15日 | 富山第一生命ビル |
| 第８回 | アレルギー疾患の治療と和漢薬 | 49年９月６～７日 | 千葉大学医学部 |
| 第９回 | 和漢薬成分に関して―和漢薬の生物活性と成分、<br>和漢薬の品質評価について、和漢薬の臨床研究 | 50年８月30～31日 | 富山第一生命ビル |
| 第10回 | サポニンとそれを含む和漢薬、胆石の成因とその治療 | 51年８月28～29日 | 富山第一生命ビル |
| 第11回 | 炎症と免疫 | 52年９月10～11日 | 岐阜市民会館 |

また、昭和53年６月に富山医科薬科大学へ移管されるまでの期間において交付された文部省科学研究費、および在職した教職員は次表のとおりであった。

**文部省科学研究費交付一覧**

| 年度 | 研究種別 | 研究代表者 | 研　究　課　題 | 交付金（千円） |
|---|---|---|---|---|
| 昭44 | 奨励研究（A） | 中島　松一 | 再生肝ラットにおける抗体産生 | 150 |
| 48 | 一般研究（C） | 渡辺　和夫 | 胃液分泌の機能調節と薬物作用に関する研究 | 900 |
| 〃 | がん特別（２） | 塚田　欣司 | 癌細胞におけるポリヌクレオチドリガーゼの機能 | 3,000 |
| 50 | 一般研究（D） | 菊池　　徹 | Homonuclear INDOR 法の立体化学への応用 | 390 |
| 〃 | 奨励研究（A） | 後藤　義明 | 胃組織内ヒスタミンの動態と胃液分泌に対する薬物作用の研究 | 270 |
| 〃 | 試験研究（２） | 渡辺　和夫 | 和漢薬厚朴の中枢抑制成分の検索 | 1,650 |
| 51 | 一般研究（A） | 大浦　彦吉 | 和漢薬の現代医療への応用に関する基礎研究 | 14,000 |
| 〃 | 一般研究（C） | 渡辺　和夫 | 和漢薬の薬効評価への消化性潰瘍実験モデルの応用 | 1,400 |
| 〃 | 一般研究（D） | 渡辺　裕司 | ストレス反応における脳セロトニン含有神経の役割とそれに対する薬物の効果 | 400 |
| 52 | 一般研究（A） | 大浦　彦吉 | 和漢薬の現代医療への応用に関する基礎研究 | 1,000 |
| 〃 | 一般研究（B） | 荻田　善一 | 罹病性体質の遺伝学的並びに病態生化学的研究 | 4,500 |
| 〃 | 試験研究（２） | 渡辺　和夫 | 胃液分泌抑制作用を有するガストリン様ペプタイド誘導体の薬理学的研究 | 2,200 |
| 53 | 一般研究（A） | 大浦　彦吉 | 和漢薬の現代医療への応用に関する基礎研究 | 500 |
| 〃 | 一般研究（B） | 荻田　善一 | 罹病性体質の遺伝学的並びに病態生化学的研究 | 500 |
| 〃 | 試験研究（２） | 渡辺　和夫 | 胃液分泌抑制作用を有するガストリン様ペプタイド誘導体の薬理学的研究 | 400 |

**歴代施設長・研究所長**

| 施　設　長 | 所　　長 |
|---|---|
| 志甫　伝逸（38.9～40.3）＊ | 林　　勝次（49.6～49.7）＊ |
| 木村　康一（40.4～44.3）＊＊ | 大浦　彦吉（49.8～51.7） |
| 三橋　監物（44.4～45.3）＊ | 難波　恒雄（51.8～53.6） |
| 大浦　彦吉（45.4～49.6） | |

＊印 事務取扱　　＊＊印 併任

**部門職員の推移**（昭和38年４月～53年６月）

| 部　門 | 教　授 | 助教授・講師 | 助　手 | 技　官・教務職員 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 資源開発部門 | 木村　正康（38.4～39.3）＊<br>木村　康一（39.4～44.3）＊＊<br>難波　恒雄（45.3～53.6） | 吉崎　正雄（38.4～53.1）<br>金岡　又雄（39.5～41.3） | 室　　郁子（38.4～39.3）<br>佐野　清教（42.12～53.6）<br>御影　雅幸（53.2～53.6） | 西条　文子（38.4～39.3）<br>塚越　章司（39.4～41.9）<br>加藤美紀子（39.4～41.3） | 浅木美紀子（39.4～40.3）<br>佐野　清教（41.10～42.11）<br>橋本竹二郎（47.1～53.6） |
| 生物試験部門 | 木村　正康（39.4～44.3）＊<br>渡辺　和夫（45.1～53.6） | 長田永三郎（39.4～44.3）<br>金岡　又雄（41.4～48.3）<br>渡邊　裕司（48.4～53.6） | 室　　郁子（39.4～43.3）<br>後藤　義明（45.4～53.6） | 池田　浩子（40.4～44.3）<br>塩田　和子（41.4～42.9） | |
| 臨床利用部門 | 大浦　彦吉（39.4～53.6） | 日合　　奨（40.4～53.6）<br>塚田　欣司（40.9～45.9） | 中島　松一（40.4～45.9）<br>横沢　隆子（45.11～53.6） | 大田　洋子（40.4～42.3）<br>長沢　哲郎（52.9～53.6） | |
| 病態生化学部門 | 塚田　欣司（47.5～49.12）<br>荻田　善一（51.5～53.6） | 塚田　欣司（45.10～47.4）<br>中島　松一（45.11～53.6） | 中島　松一（45.10～45.11）<br>寺岡　弘文（48.9～50.4）<br>森　　正明（50.5～53.3）<br>山村　研一（53.4～53.6） | 尾崎　　洋（46.6～48.3）<br>林　　和子（51.8～56.3） | |
| 化学応用部門 | 菊池　　徹（49.11～53.6） | 金岡　又雄（48.4～53.6） | 門田　重利（51.4～53.6） | 門田　重利（50.4～51.3） | |

＊薬学部薬物学教授兼担　　＊＊京都大学教授併任（39.4～40.3）